

草原がつなぐ人・自然・文化

全国草原再生ネットワーク

ニュースレター vol.39 (Jul. 2019)



国際茅葺き会議でのワークショップ（京都府南丹市美山町／白川勝信氏提供）

第 13 回理事会・総会が開催されました

2019年6月22日(土)～23日(日)、東京都内で、全国草原再生ネットワークの第13回の理事会・総

会、それに先だつての「サミットを語る会」が開催されました。当日の様子について報告します。

理事会・総会の報告

(横田潤一郎：大阪府在住／ネットワーク理事)

令和元年6月23日、東京都港区において第13回全国草原再生ネットワーク理事会および総会が、11人(委任者21名)の参加を得て開催されました。

まず、事務局から平成30年度の事業報告・決算報告がなされ、一部の文言、表記の訂正のもと、全員一致で承認されました。平成30年度は、会費納入のお知らせを近年の納入状況とあわせて送付したことで未納金の納入が進んだことが報告され、今後定期的な納入のお知らせを行うことになりました。

次に、平成31年度の事業計画・予算の提案がありました。ここでは、前日に開催された「サミットを語る会」での活発な議論を引き継ぎ、熱量の高い意見が飛び交いました。特に、「①未来に残したい草原の里100選の選定に向けた草原データベースの構築」、「②情報提供事業の適正化と労力削減」、「③草原再生ネットワークの一般社団法人化」について、具体的な提案がありました。

①については、これまでも草原DBの定義づくりが課題となってきました。一口に草原といっても、草原の特性(自然草原や湿地など)、草原の規模(町をまたがる広大なものから、空き地のようなものまで)など、全ての草原に適用できる一律の基準づくりは困難でした。今回の議論で、ネットワークの主旨に合致すると思われる草原であれば、どのようなものでも登録することになりました。その際、草原の特性と登録日をDBに盛り込むことで、データを使いたい人が情報を取捨選択できるようにしていくことになりました。これにより、現在は管理が放棄されている草原も登録できるようになりましたので、会員の皆様からの情報をお待ちしております。

②については、ウェブサイトの更新やニュースレターの配信について議論がありました。事業計画が上がったウェブサイトの刷新については、総会に先立ち6/21に更新され、会員特典として会員専用ページが新たに公開されました。皆様の積極的な活用と情報提供を期待します。また、ニュースレターについては、紙面の郵送をPDFによる配信に変えるこ

とで、労力の削減と団体会員への配慮ができるのではという提案があり、今年度の事業で試行していくことになりました。このほか、昨年度の事業で始まった、Twitter botによるヒヤリハット事例の配信も話題となりました。こちらは新たなヒヤリハット事例の追加が課題となっていることから、ウェブサイト上の情報登録フォーム設置、各会員団体への事例提供のお願いをしていくことになりました。

最後に、③の一般社団法人化が事務局より提案され、議論を踏まえて組織づくりへの準備が始まることになりました。この、ネットワーク法人化の目的は、主に、「委託事業の受注に向けた組織整備」「全国草原の里市町村連絡協議会との連携における信用確保」です。法人化に関する議論では、相互団体会員である一般社団法人茅草き文化協会のご協力も得ながら、具体的に必要となる準備や手続きのほか、法人移行の際の留意点を整理しました。今年度の事業において、定款・規約などを整備し、無事に準備が整えば、当ネットワークの受け入れ先となる法人を設立することが承認されました。

事業計画の他の計画についても、総会での議論を反映して修正することとして承認され、すべての日程を終えました。これから、具体的に検討が始まった「未来に残したい草原の里100選」の選定を進めるにあたり、ネットワークがさらに発展していくことが期待されます。



<役員交代について>

今回の総会を経て、右のような役員交代がありました。退任された皆様に感謝の意を表します。

【退任】	【新任】
(理事) 山田朝夫氏 (常滑市)	志賀郁夫氏 (竹田市)
(監事) 国安俊夫氏 (日本ボランティアセンター)	太田陽子氏 (美祿市立秋吉台科学博物館)

草原 100 選・東伊豆サミットを語る会 (報告)

(笹岡達男：東京都在住/ネットワーク理事)

総会に先立つ 6 月 22 日 (土) 午後、標記会合が TKP 新橋汐留ビジネスセンターで開かれました。

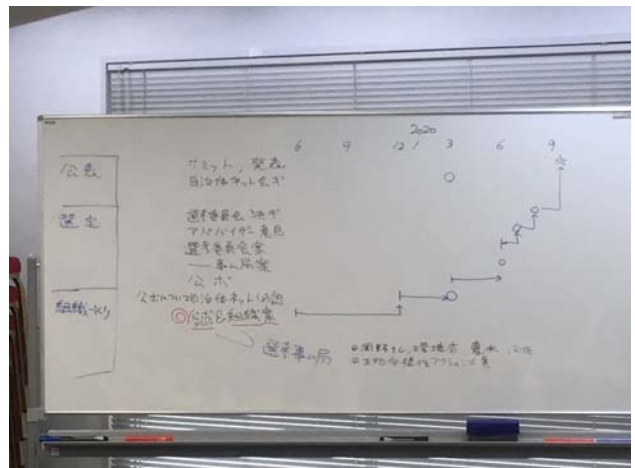
まず、東伊豆町の岩崎係長から、2020 年 9 月 27 日 (日)・28 日 (月) の日程で「第 13 回全国草原サミット・シンポジウム in 東伊豆」の開催が決定したこと、及び開催地 (細野高原ほか) に関する資料配付と説明がありました。今後は、大会実行委員会を発足させて順次内容を詰めていくこととなります。全国草原再生ネットワークとしてもこれまでの全国サミットと同様高橋会長以下が実行委員会に加わり全面的に協力していく意向が示されました。(その後の調整により、実行委員会には高橋会長及び在京の笹岡理事が参画することになりました。)

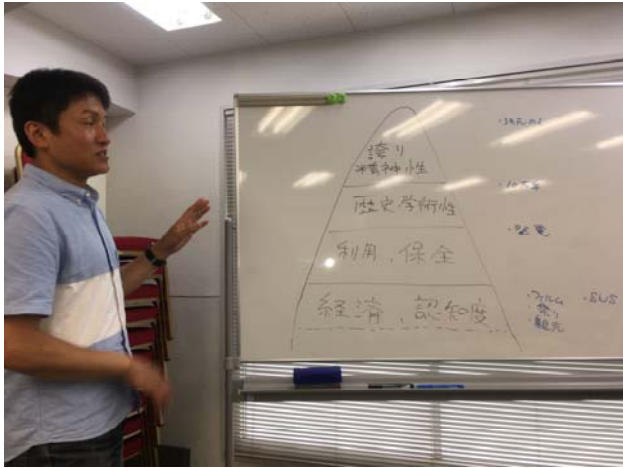
続いて、「全国草原の里市町村連絡協議会 (草原自治体ネット)」と「全国草原再生ネットワーク」が協力して実施することとなった「草原の里 100 選」(仮称) 事業の進め方について、参加者の間で自由に議論を行いました。

草原ネット事務局より、これまでの検討経緯 (環境省での打合せ (2018 年 12 月)、草原自治体ネット総会 (2019 年 3 月)、草原ネット事務局会議) 及び関係者からのコメントなどの資料とともに、事前検討の素材となるいくつかの項目、論点が示されました。以下その主要項目に沿って当日の意見交換の

概要を報告します。(今回はあくまでもフリートークングなので決定事項はありません。)

- (1) 名称案 (事務局案) 「未来に残したい草原の里 100 選」
 - ・趣旨を明らかにすること、「人」に焦点を当てることからこのような案にしたとの説明があり、特に異論はありませんでした。
- (2) 全体の流れと項目
 - ・大まかに、「選定のねらい、メリットの整理」「募集・アナウンス」「応募・選定」「公表・選定後の運用」というような手順で進める。
 - ・その前提として全体を回していく「組織づくり」が必要。
 - ・第 1 回の選定結果を東伊豆町でのサミット (2020 年 9 月) で公表するとすれば、そこから逆算したタイムスケジュールの作成及び管理が必要であり、かなりタイトなスケジュールになることが想定されました。
- (3) 選定のねらい・募集のアナウンス時期
 - ・特に選ばれる立場 (地域) にとってのメリットをどのように整理し、どのような人々をターゲットに訴求するか、等の議論が行われました。
 - ・例えば





「誇り・精神性」については、地元の人や、政治家、文化人などに
 「歴史・学術性」については、学会、研究者、専門家などに
 「利用・保全」については、バイオマスや茅の利用を考える人々、関係団体などに
 「経済・認知度」については、観光・イベント等を企画運営する主体や、マスコミその他の関係業界などに
 というような整理を行いつつ、具体的な訴求先や協力要請のあり方について提案や意見交換を行いました。

(4) 応募段階

- ・応募主体については、「自治体」「活動団体」「第三者」などが想定され、多様な形態を考慮すべきとの議論に加え、いずれの場合でも地元自治体の関与は不可欠との意見が出されました。

(5) 選考段階

- ・ある程度客観的な選考基準は必要だが、余り煩雑にならないように。
- ・書類審査に加え、現地調査も必要と思われるが、誰がどのようにやるのか。
- ・選考委員会を立ち上げて審議するとともにアドバ

イザー等の意見をくみ上げるプロセスも必要か。等々の意見が出されました。

(6) 選定後の運用

- ・公表は基本的には「全国草原サミット・シンポジウム」の場で行うのが最適というのがほぼ共通の見解。
- ・選定されたことが各種補助・助成制度等を受ける際の「お墨付き」として役立つようになれば良い。

(7) その他（全体を通じて）

- ・公募・選考の進行管理を行う事務局づくり（環境省や関係省庁等の協力も求める）急ぐとともに、節目節目で「草原自治体ネット」の承認を求めるプロセスが必要との認識が共有されました。

限られた時間の中で、今後こなしていくべき課題は少なくありませんが、全国草原ネット会員の総力を結集しながら、関係者、関係団体の協力を得て「草原 100 選」を選定していくための第一歩が踏み出された会になったと思います。「東伊豆サミット」の成功に向けての取り組みと合わせて、今後とも様々な形で会員各位のご協力をよろしくお願いいたします。

なお、本セッションへの参加者は、会員及び東伊豆町関係者を合わせて 12 名でした。

各地からの報告

日本で開催された国際茅葺き会議に、各国から 150 人の茅葺き職人が参加

（白川勝信：広島県在住／ネットワーク理事）

国際茅葺き協会

国際茅葺き協会（ITS：International Thatchers Society）は、茅葺き建築に関する知識や情報を交換するための国際的なプラットフォームです。ITS に

はイギリス、オランダ、スウェーデン、デンマーク、ドイツ、南アフリカ、そして日本の 7 か国が加盟しています。今回は ITS として第 6 回の国際会議で、日本では初めての開催だそうです。会期の前半 2 日

間は岐阜県の白川村でカンファレンスやフォーラムが開催され、実際に白川郷で合掌造りの屋根葺きも行なったそうです。後半の2日間は西日本に移動し、京都市清水寺の檜皮葺修理現場をはじめ、茅葺き建築や竹中大工工具館など、主に現地を見学するプログラムでした。僕が合流した20日午後には、参加者たちはすっかり打ち解けている様子でした。

京都府南丹市美山町の見学

美山町に着くと、まずは茅葺き屋根の消火剤について、能美防災株式会社によるデモンストレーションがありました。水に特定の無機物を混合してゲル化させることで付着性を高め、延焼防止や燃焼抑制の効果を期待するものです。まだ開発中ということでしたが、確かに効果が示されました。職人からは、単位面積に必要な量やコストについて具体的な質問が出ていました。まだ開発中ということでしたが、保護の選択肢が増えることは良いことだと思います。

昼食の後、職人の一行は、ガイドから美山町北集落の町並みや自然環境についての説明を受けながら歩きましたが、やはり興味は茅葺き建築に集中していました。なかでも職人が使う道具には興味津々で、日本の職人に用途を聞いたり、自分の使っている道



消火剤のデモンストレーション



茅葺きのワークショップ

具を写真で見せたり、中には「これはどこで購入できるのか」という質問も出ていました。

ワークショップ

ワークショップの現場は、北集落を上りつめた場所にありました。現場に着くと美山茅葺きの職人さんたち7人がすでに屋根葺きの作業をされていて、参加者が数人ずつそこに加わり、茅を葺いていきます。大げさな言い方をすると、国の重要伝統的建造物群保存地区の景観形成に、様々な国の職人たちが加わっているわけで、こんな茅葺き建築の「間口の広さ」が面白いな、と思いました。職人たちはここでも議論をしていて、特に道具のことや、角の葺き方が話題になっていたようです。

茅葺きオリンピック

予想外だったのが茅葺きオリンピックです。競技は2種目あって、茅束を投げて直径80cm程度の輪をくぐらせる投げ込みと、できるだけ遠くに飛ばす遠投です。いずれも各国3人が2回行い、くぐった数と飛ばした距離で競います。プログラム表を見た時には余興程度に思っていたのですが、職人たちは皆すごいヤル気です。聞けば、茅葺きの現場でも、地面から屋根の上に向けて茅束を投げ上げることもあるそうです。力を見せることはもちろんですが、アルコールも入り、国対抗というのが盛り上げさせるのでしょう。競技はとともテンポ良く進んで行き、投げるたびに歓声が上がりました。日本人が投げる時には「Sake! Sake! Sake!」と謎の酒コールが上がっていました。

感じたこと

茅葺き職人同士が話しをする場に居合わせること



茅葺きオリンピックの様子



茅葺きオリンピックの様子

ができたのは、自分にとっては大きな経験でした。屋根の上で葺き方について確認し合う時は、短い時間の中で技術を知らんとする真摯な姿勢が感じられました。茅葺きの屋根は 30 年もすれば葺き替えが必要になります。職人たちは、その「束の間」のために仕事をしているわけです。儂さを知りながら最高の力を注ぐ、という姿勢を傍らで見させてもらったことに、色々と考えさせられました。

何かを作るとき、僕らはい「長く使えるもの」「普遍的なもの」をめざしてしまいがちですが、世の中の多くのものが永遠には存在しません。いつかは葺き替えをすると知りながら最適解を探して手を動かし続ける職人の姿は、米作りをする農家や、舞台演劇の役者にも通じるものがあるなあ、と感じてしまいます。そして不思議なことに、普遍性を追い続ける研究者と、時限を意識しながら手を動かす職人は、違うのだけど同じ空気を感じたりもします。

全国草原リレー（第 19 回）

ネットワークの会員を中心に、持ち回りで各地の草原を紹介するのが「草原リレー」です。第 19 回は、監事でもあるグラウンドワーク大山蒜山の徳永氏

に、大山周辺での最近の取り組みについて紹介して頂きます。

クマタカの森と大山山麓のモザイク環境

（徳永 巧：グラウンドワーク大山蒜山／ネットワーク監事）

蒜山地域（岡山県真庭市の北部）では、津黒いきものふれあいの里の活動などで関係集落とボランティアによる山焼き活動による草原の保全が進められ、新しい局面もみえる状況になってきたが、蒜山地域に隣接する大山地域では奥大山（鏡ヶ成）での山焼き復活の動きがみられるものの、船上山での山焼き

が継続されているほかはこれといった草原保全の活動はみられない。

西日本最大級のブナ林を誇る大山ではイヌワシやクマタカの生息が知られており、森林生態系の保全を求める声も多く、とりわけ、クマタカは大山山麓の山里地帯で姿を見ることがあり、大山環状道路周



クマタカ（長船裕紀氏撮影）



大山（日光地区）でのササ刈りによる里山再生活動

辺に広がる樹林域はクマタカの生息地になっており、その保護が求められている。

そのような中、先月、山形県酒田市にある「鳥海南麓自然保護官事務所・猛禽類保護センター」を訪ねることがあり、希少種保護増殖等専門員からイヌワシとクマタカの保護と草原の保全について以下のような興味深い話を聞くことができた。

かつて人々が茅葺屋根の材料や家畜の餌、薪や炭などに山の資源を利用していた時代は、伐採や採草といった適度な人為的関与が、イヌワシやクマタカの生息しやすい環境を創出していたと考えられています。“山岳”や“奥山”をイメージされることの多いイヌワシでさえ、人が利用していた二次的な森林＝里地里山も、一部の地域では彼らの生活にも適応しやすい環境だったと考えています。今でも人々の生活圏のすぐそばに生息していることも珍しくありません。

一般的にイヌワシは草原性、クマタカは森林性といわれており、こういった異なる性質の大型猛禽類が同所的に分布・生息している点は、世界的に関心の高いことといえます。日本に生息するイヌワシは世界的に最も小型の亜種とされており、小型化が森林に覆われた日本での生活を可能にしたのかもしれませんが、とはいえイヌワシにとって草原は狩りを行う環境としては重要な存在であることには変わりはありません。

現在イヌワシの繁殖成功率の低下が続いている原因の一つに、二次的草原や半自然草原の減少があげられています。一方クマタカですが、森林性といっても管理されず鬱閉した人工林は生息には適しません。クマタカは忍者のように林内を巧みに移動することができますが、ある程度の空間は最低限必要です。近年、伐期を迎えたスギ人工林に営巣するクマタカが全国的に確認されるようになりました。管理された人工林であればクマタカの生息も可能とし、健全な管理が継続している人工林であれば多様性豊かな環境として見直される場合もあります。

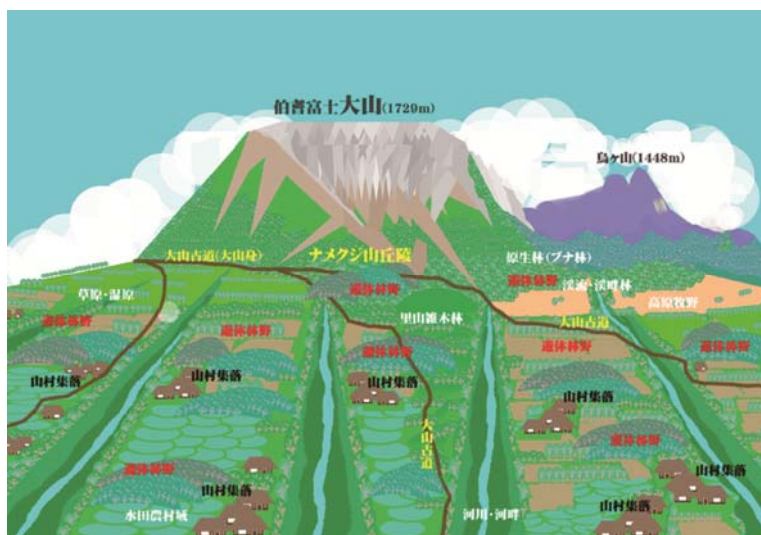
一度人が手を加えた環境が壮麗な天然林に戻るには時間を要することから、猛禽類の保全においては健全な維持管理と段階的管理目標が求められます。しかし、

大山山麓のモザイク環境



大山山麓のススキ野原（耕作放棄地）

猛禽類の保全を目的とした活動を続けていく枠組みは困難なことも多く、長続きさせていくことは並大抵のことではありません。そこで最近は猛禽類以外の保全活動に取り組んでいる取り組みにも注目しています。例えばウスイロヒョウモンモドキ等に代表される草原性の希少種保全を目的とした草原再生は、その活動エリアが広く持続的であればあるほど、その地域に生息するイヌワシへはプラスの効果が期待されます。また、何より大事なものは地域産業です。東北地方では今でもワラビ産業の盛んな地域があり、火入れや刈払いによって広大な面積が草原として維持管理されています。「観光ワラビ園」として運営されており、地域の観光協会も支援するなど観光産業としての側面も有しています。かつては生産者がそのまま加工販売をしていたことも多いようですが、担い手不足や高齢化によって年々産業の衰退が進み、放置される二次的草原も増加していきました。ところが、地域では6次産業化を進めることで付加価値を生み出し、新たな流通の拡大や雇用をも創出する取り組みを開始しており、山菜がもたらす新たな地域ビジネスとして注目しています。なにより消費が



促進されなければ産業は衰退し、ひいては草原環境の衰亡に直結します。人口減少や地域産業の衰退は全国共通の課題ですが、新たな火種となる戦略や仕組み作りのヒントを普及させることも、希少種保全には重要なことと考えています。

・・・以上が専門員の長船裕紀さんの話しである。

私どもも数年前から大山の西南麓に開けた山里地帯（鳥取県伯耆町日光地区）において、地区住民とササ刈りによる里山再生活動を進めているが、このあたりはクマタカの姿を目にすることも多く、餌場となる里地里山のモザイク環境の保全再生についても積極的に取り組みたい。

草原をめぐる動き（2019年7月～2019年10月）

- 7/6 自然観察交流会④（場所：山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先：乙女高原ファンクラブ）
- 7/6 雲月山の植物観察（場所：広島県山県郡北広島町、連絡先：西中国山地自然史研究会）
- 7/7 草原の復元作業1（場所：山口県美祢市秋吉台、連絡先：秋吉台草原ふれあいプロジェクト事務局）
- 7/13-14 上ノ原防火帯刈払い・侵入木除去・自然環境モニタリング（場所：群馬県みなかみ町、連絡先：森林塾青水）
- 7/13-9/1 特別展「根・子・ねずみ～ネズミワールドへようこそ～」(カヤネズミの飼育展示あり)（場所：埼玉県大里郡寄居町 埼玉県立川の博物館、連絡先：埼玉県立川の博物館）
- 7/20 秋吉台お花畑プロジェクト1（場所：山口県美祢市秋吉台、連絡先：秋吉台草原ふれあいプロジェクト事務局）
- 8/3 自然観察交流会⑤（場所：山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先：乙女高原ファンクラブ）
- 8/3 マルハナバチ調べ隊②（場所：山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先：乙女高原ファンクラブ）
- 8/4 千町原の保全活動（夏）（場所：広島県山県郡北広島町千町原、連絡先：西中国山地自然史研究会）
- 8/10 千町原のいきもの観察（場所：広島県山県郡北広島町千町原、連絡先：西中国山地自然史研究会）
- 8/12 深入山のいきもの観察（場所：広島県山県郡北

- 広島町千町原、連絡先：西中国山地自然史研究会）
- 9/7-8 ミズナラ林の間伐と遊歩道整備（場所：群馬県みなかみ町、連絡先：森林塾青水）
- 9/7 自然観察交流会⑥（場所：山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先：乙女高原ファンクラブ）
- 9/7 マルハナバチ調べ隊③（場所：山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先：乙女高原ファンクラブ）
- 8/12 霧ヶ谷湿原のいきもの観察（場所：広島県山県郡北広島町千町原、連絡先：西中国山地自然史研究会）
- 8/25 野焼き支援ボランティア 2019年夏・初心者研修会（場所：熊本県阿蘇市、連絡先：阿蘇グリーンストック）
- 9/28 草原の復元作業 2～セイタカアワダチソウの駆除作業～（場所：山口県美祢市秋吉台、連絡先：秋吉台草原ふれあいプロジェクト事務局）
- 10/5 自然観察交流会⑦（場所：山梨県山梨市牧丘町乙女高原、連絡先：乙女高原ファンクラブ）
- 10/5 秋吉台お花畑プロジェクト2（場所：山口県美祢市秋吉台、連絡先：秋吉台草原ふれあいプロジェクト事務局）
- 10/19-20 上ノ原の茅刈り（場所：群馬県みなかみ町、連絡先：森林塾青水）

※上記以外の情報もホームページで随時公開しています。

全国草原再生ネットワーク ニュースレター vol. 39 2019年7月号

全国草原再生ネットワーク事務局

〒694-0064 島根県大田市大田町大田イ 376-1

NPO 法人緑と水の連絡会議内 Tel. 0854-82-2727 Fax. 0854-84-0262

【編集後記】草原 100 選・東伊豆サミットを語る会の報告でもあったように、来年開催されるサミット・シンポジウムに向けて、様々な活動が始まりました。とくに草原 100 選の選定に向けては、たくさんの方の協力が必要になると思いますので、よろしくお祈りします。